

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 石黒圭,橋本行洋  
編 『話し言葉と書き言葉の接点』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石黒, 圭 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000799">https://doi.org/10.15084/00000799</a>

石黒圭, 橋本行洋 編

『話し言葉と書き言葉の接点』

ひつじ研究叢書(言語編)第122巻

2014年9月 ひつじ書房 A5判 292ページ 5,600円+税



石黒 圭

## 1. 本書の出版の経緯

本書は、2013年6月、日本語学会春季大会(大阪大学)で行われたシンポジウムをもとにした論文集である。シンポジウムの企画を立てるにあたり、「日本語の研究者であれば、誰もが興味を持てそうなテーマを」と考え、話し言葉と書き言葉を取り上げることにした。

一般に、話し言葉と書き言葉の研究では、話し言葉と書き言葉がどう違うか、その相違の諸相に重きが置かれがちである。しかし、シンポジウムでは、近年、ブログやTwitter、Facebookなど、ソーシャルメディアの発達によって、話し言葉と書き言葉が急速に接近・融合する現象が起きている点に注目し、話し言葉と書き言葉の連続性があぶりだせる「話し言葉と書き言葉の接点」をテーマに設定した。さいわい、シンポジウム当日には、フロアとのあいだで活発な質疑が生まれ、それを機に、本書刊行の企画が軌道に乗った。

シンポジウムの企画者である2名の司会が編者となり、当日の4名のパネリストにくわえ、本テーマに関わる第一線の研究者7名に声をかけた。その結果、共時・通時の両面から、話し言葉と書き言葉の接点に関わる多様な現象を多面的に分析できる陣容が整った。

## 2. この本の構成

本書は、次のような13本の論文で構成されている。

### I 共時的研究

フィクションの話し言葉について—役割語を中心に—(金水敏)

話し言葉が好む複雑な構造—きもち欠乏症を中心に—(定延利之)

ヴァーチャル方言の3用法—「打ちことば」を例として—(田中ゆかり)

疑似独話と読み手意識(野田春美)

話し言葉と書き言葉の語用論—日本語の場合—(滝浦真人)

現代日本語の多重的な節連鎖構造について—CSJとBCCWJを用いた分析—(丸山岳彦)

指示語にみるニュースの話し言葉性(石黒圭)

文字の表音性(屋名池誠)

### II 通時的研究

古代における書きことばと話しことば(乾善彦)

鎌倉時代口語の認定に関する—考察—延慶本平家物語による証明可能性をめぐる—

(山本真吾)

明治前期の手紙文にみられる「口語体」(野村剛史)

書かれたはなしことば(今野真二)

「全然」とその振り仮名(橋本行洋)

### 3. 本書の内容

本書は、話し言葉と書き言葉に関わる現象を広く見ることを目的としているため、掲載されている論文は、時代も対象も観点も多岐にわたる。そこで、ここではシンポジウムで話された四つの論文のみを取り上げ、内容を簡単に紹介することにしたい。

定延論文は、話し言葉は単純な構造を好むという私たちの「常識」を覆し、「きもち欠乏症」をキーワードに、一般には気づかれにくい、話し言葉が好む複雑な構造があることを示す。そして、筆者が得意とする、鋭い洞察にもとづく言語事実の発掘をとおり、日本語のある種の発話では、気持ちが表れていないと不自然になり、それが話し言葉の複雑さを生みだしているという不思議な現象があることに気づかせてくれる。

田中論文は、「打ちことば」であるブログに出現する方言形式の文末表現を調査し、①当該の土地と発信者の関連を喚起させるタイプ、②当該の土地とブログの話題の関連を喚起させるタイプ、③喚起されるキャラがブログの執筆態度と臨時的に結びつくタイプ、の三つに分類する。そこから、ブログにおけるそうした演出を意識した方言使用に、古くから見られる方言による創作活動との共通性を見いだし、通時的な分析へつなげる地平を照らしだす。

野田論文は、エッセイ、ブログ、Twitterなどを対象に、心のなかの言葉に似せた表現がどのように現れるかを豊富な具体例により詳細に記述する。その記述をとおり、文章に表れる読み手意識には段階性があり、それが文章のテキストタイプと密接な結びつきがあることが看取できる図式が提示され、成熟期を迎えたモダリティ研究への新たな視角が示唆される。

野村論文は、明治前期の文豪の手紙文に言文一致体の萌芽を見い出す興味深い試みである。現代の多様なソーシャルメディアは、話し言葉と書き言葉をめぐる従来の単純な二分法を無意味なものにした。しかし、そうした状況は今日初めて生じたわけではなく、郵便事情が良好であった明治前期にすでに現出していたという興味深い事実を、本論文は教えてくれる。

話し言葉と書き言葉の狭間には、まだまだ研究の鉤脈が眠っている。そのことを確信できたことが、本書の編集を担当して得た最大の収穫であった。

### 石黒 圭 (いしぐろ・けい)

国立国語研究所日本語教育研究・情報センター准教授。一橋大学大学院言語社会研究科連携教授。博士(文学)(早稲田大学)。一橋大学国際教育センター教授を経て、2015年4月より現職。

主な著書・論文：『よくわかる文章表現の技術(全5巻)』(明治書院、2004-2007)、『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』(ひつじ書房、2008)、『文章は接続詞で決まる』(光文社、2008)、『日本語は「空気」が決める—社会言語学入門—』(ひつじ書房、2013)。

受賞：第7回日本語教育学会奨励賞(日本語教育学会、2009)。

社会活動：国立大学日本語教育研究協議会代表理事、日本語教育学会代議員・大会委員会委員、日本語学会評議員、日本語文法学会評議員、表現学会評議員。